

# 脚本「BAR裏面」

脚本・原作

Studio  
スタジオオ

オリジナル脚本

放送後音声公開可

放送後脚本公開可

二〇一八年三月二十七日

## 登場人物

男 妻と子供を持つ、どこにでもいる平凡な中年サラリーマン。

女 ふと立ち寄ったバーで飲んで居た若い女。

マスター

バー裏面の女主人

## 懐概・あらすじ・プロット

文字数 三千文字

所要時間 十五分

1.

(N) : ナレーション

B A R 裏面

原作・脚本 : スタジオ

登場人物 ..

男

妻と子供を持つ、どこにでもいる平凡な中年サラリーマン。

女

ふと立ち寄ったバーで飲んで居た若い女。

マスター

バー裏面の女主人。

N A

”人生とは”多くの人がそれに対する答えを探し出してきた。それは山であったり川であったりはたまたスポーツであったりゲームであったり…要するに人生とは随分と節操のないものなのだ。そしてその答え合わせができる程、サラリーマンは暇では無かった。

2.

休憩

男モノ

「世間は三月。

新生活に浮き足立ち、或いは胸躍らせ、街も何処か明るく色めく四季の桜色。

---

世間では、出会いと別れの季節、などとも言われる  
年度の境…

…そう世間こそ人生の中心である、と言っても良  
いかもしれない、などと考えている内に今日も  
仕事が終わっていた」

男モノ

「今日がやつと終わった…

今日は昨日と何が違ったんだ…。部下のちよつと  
したミスに唾を飛ばして喚く上司の額の皺が、少  
し伸びたと気づいた事と、今年入社した新人の田  
中が外回りから戻らず、その尻拭いをしていた事  
ぐらいか…。」

SE 《風の音》

男モノ

「まだ夜は冷えるな…

ひさびさに立てたコートの襟がなんとも頼もしい  
事か。

灯の消えたショーウィンドウにうつる私の背は丸  
まり、老いた老人と瓜二つだな…まさしく重りを  
運ぶ奴隷の様相だ。人生とは、生涯をかけての償  
い…わたしはもうそろそろ…

ん…？ あんなところにバーなんてあったっけな  
…。バー裏面…

終電ももう直ぐだが…これだけ遅くなったらもう何  
時に帰ろうが大して変わらないだろう」

SE 《扉開く音》

男モノ

「閑散とした店内に、客は女一人…か」

男

「こんばんは〜」

マスター

「……………」

男

「あのー……………」

女

「こんばんは。ごめんなさい、マスター耳が聞こえづらいみたいで。マスター！客さん」

男

「どうもすみません。初めて来たもので」

女

「あはは、私も初めてですよ。」

さつき来たばかりですけど…ここ、居心地良いんですね。マスターのおかげで案外言葉って不要だなあって思えてきました。唇の動きとジエスチャー…で大体伝わるっていうか…

あ、とりあえず座ったらどうですか？。

マスター美人だから見とれちゃいました？。ほ

らマスターも、どうぞって。」

「あっ…。はあ。それでは、隣…失礼します」

「あれ？コートも脱がないんですか…あ！すぐ帰る気だ！マスターこの人長居したくないみたい

（笑）

「イヤイヤ…そんなことは。

コートお願いします」

「マスター、ビールお代わり！」

男

女

男

女

男

女

男

男

「あ、じゃあ私もビール…いや、こないだ健康診断で引っかけたから日本酒にしようかな…それと柿の種ありますか？」

4.

ビールと柿の種

S E

《置く音》

男

「ありがとうございます」

女

「柿の種、美味しいですよー。私も好きで、よく食べるんですよ」

男

「…その割にピーナッツばかり減っているようですよけど？…もうだいたいぶ飲んでるようですね」

女

その年で絡み酒とは…あんまり感心できたものじゃありませんよ…。」

「ふふ、いいじゃないですか。椅子はたった五つ。狭い空間。今、お客さんは私たち二人だけですよ？」

せつかくなんだから…お話ししましょうよ。

あ、あと柿の種。私…好きなものは最後に取っておくタイプなんです」

「ははは、私の娘みたいだ。好きなもの取っておく、か…子供の頃はそうだったなあ私も」

「あ、今子供扱いしましたね！？ひどーい！

つてゆーか、お子さんいらっしやるんですね。

仲いいんですか？」

「ふ、仲ね…仲はほどほどかな。」

男

女

男

---

女 男 女 男 女 男 女 男 女 男 女

---

世間でよくあるごくごく平凡な家庭…かな。ここ数年はもっぱら、寝顔ばかりちらと見る程度だよ。子供と嫁が起きる前に出社して…。ふう…

マスター、ここタバコは？

そう、か…：：：なら仕方ないか…

こいつらの出番は無いな…」

「タバコ吸うんですね？」

「ああ、なかなかやめられなくてね。嫁にもやめてくれやめてくれて言われるんだけど、やはりどうにも口さみしい」

「ふうん…：：：奥さん可哀そう、さぞ嘆いてる事でしょうね」

「嘆くどころか、

いつもぷりぷり怒ってるよ」

「そりや怒りますよ。お願い聞いてくれないんだから」

「耳が痛いなあ…

…：：：：：だけ止められん止められん」

「？なんですかそれ？」

「え？知らない？ジェネレーションギャップかな

あ…：：：：」

「って言ってもそこまで違わないと思いますけど

…：：：：：私は二十六歳です。あなたは？」

「私はもう四十だよ。しかし…：：：：：知らないかあ

…：：：：：そうかあ…：：：：」

「何落ち込んでるんですか。とにかくっ！ここで出会ったのも何かのご縁！乾杯しましょう♪

ハイ、乾杯——」

男 「あ、ああ…乾杯」

SE  
《乾杯》

女 「まあでもタバコ、ほどほどにしといた方が良く  
と思いますよ？健康あつての人生ですし……つて  
すみません、お節介ですよね」

男 「いやあ、構わないよ。その通りだと思う。健康  
あつての人生…」

女 「んっ……んく……ぷはあ！！マスター、  
もう一杯！

あぁくくあ

人生やつてらんない」

「言ってることとやってること無茶苦茶だ…」

何か嫌なことでもあつたんですか？」

「んー……まあ、そんなとこです。んー、柿の種

美味し♪」

5.

客の話

女 「あなたは悪い人じゃ無さそうだし、折角だか  
ら話、聞いてもらえますか？ 実は今日、私、  
婚約者にフラれたんです。婚約破棄ってやつで  
す」

「…」

男 「理由は私が母子家庭だからですって。世間体だ  
なんだって、いつの時代の話だよ！って思いまし

女 男 女

女

男

女

男

女

男

たね。まあ今まで母子家庭で色々言われてきま  
したから、仕方ないのかな、って。

でも！だったらなんで結婚しよう。なんて言っ  
てきたんだって感じですよ。こんなオメカシした  
の人生で初めてかもしれないのに…」

「……………その、お父さんは？」

「亡くなりました。私が小さい頃に。あなたより  
何歳か年上だったのかな？働いてばかりいて、い  
つのまにか追い詰められてたんじゃなかった…  
…ある日急に電車に飛び込んだそうです」

「働くのが父の役目、とは言え…それは…………」

「ええ死んじゃったならなんにもなりませんよね」

「……………そうだね。確かに…………お母さんは？

お父さんが亡くなってから」

「うーん、悲しいのはもちろんだけど、悔しい  
し、少し恨んでるって」

「それはまた…………どうして？」

「お母さんが口を酸っぱくして、健康に気を遣  
え、疲れてるなら無理せず休め。仕事があまりに  
も大変なら転職しても休職しても良いって言っ  
たのに… オレが働かないでどうやって飯を食  
う！って突っぱねてみたいで。死んじゃった  
お陰で、老後に色んな山、一緒に登ろうって約束  
してたの、反故にされた、って…」

SE

《置く音》

女

「…っと、あんまり遅いとお母さん心配しちゃ  
う。そろそろ帰りますね。あなたは奥さんとお子

女

男

女

男

女

男

女

男



女

S  
E

《扉の音》

さんのこと、大事にしてあげるのはもちろん、ご自身の事も大事にしてあげて下さいね。では」

「マスターお会計ココおいときますね〜」

6.

男  
独り語り

男

男

「あ、ちょっと……！凄いい勢いで行っちゃったな……」

「まったく……耳がいたい……健康診断で要精密検査という結果を受けた時、仕事が忙しくて随分長いことすっぱかし、その事でよく嫁と喧嘩に。実は先月病院に行ってきたんです……。診断結果は……嫁には伝えないつもりでした。」

……マスター、私もね、大学の時分登山にのめり込んでいたんでたんですよ。

嫁とは山歩きで出会って、そのまま付き合っ  
結婚して……娘が生まれて……。それから、家族を養わなくちゃって、遮二無二働いて……だけど……  
すいません……なんだか話したくなっちゃって。

わたしもそろそろ帰ります。

ご馳走様でした。

すっかり忘れてた約束、守らなきゃ恨まれても仕方ない」

S  
E

《扉の音》

男モノ

「時計を確認すると、終電の時間が、まだ私の背後に立っている。不思議に思いバーを振り返ると、今まさに出てきたその場所には、前衛的なスプレーアートで化粧したシャッターが鎮座していた。散りばめられた色達の片隅、浮かび上がるように英語がひとつ…書かれている。」

Remember

バーうらめん…

バーりめん…

リメンバー……」

男モノ

「“人生とは”、多くの人がそれに対する答えを出してきた。私は考える暇も無いサラリーマンだ。大仰な答えは出せはしないだろう。——それでもまず…生きていこう。私はそう思う」

N A

テーブルにお金を置き男が店を出れば、扉は消え、BAR裏面は閉店となりました。皆さんは、忘れていた約束、ありませんか？

男役

十河圭祐

女役

三好麻美

ナレーション

吉田香里奈

原作脚本

スタジオ

選曲、効果

十河圭祐